

ToLOVEる 魔王降臨

元気マックスssさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彩南町には噂がある、『魔王が現れる』という噂が。

結城リトおよび美柑には従兄がいる。

これはそんな魔王と呼ばれた不良であり結城リトと美柑の従兄である少年が送るT
OLOVEるな日常を記した物語である。

目次

トラブル 1	魔王が現れた	—	—
トラブル 2	与えられた使命	—	—
トラブル 3	宇宙からの侵略者	—	—
トラブル 4	素敵なマイマザー	—	—
トラブル 5	鉄の心	—	—

33 26 18 9 1

トラブル1 魔王が現れた

俺か不良と呼ばれるようになったのはいつからだろう。小学生の時に同級生を泣かせたときか？中学生の時に一度だけタバコを吸ったからか？それとも同級生や下級生や上級生問わず殴りまぐつたからか？それとも。

「イギイ！」「ウガア！！」「ギイア！！」

「チツ！……おいこら」

喧嘩売られたから買って、相手返り討ちにして金奪つてるからか？

「しけてんな、昨日殴り飛ばした奴より少ねえぞ」

俺は不良それも異名つきの不良。こここら辺では『魔王』なんて呼ばれてる、そんな俺の名前は『江崎レイト』だ。

「つまんねえしサボるか」

俺はそのまま学校を出て家へと帰った。帰る途中、五人くらい不良がいたので殴り飛ばして金ぶんどつた。



「ただいま」

家に戻ってきた俺は帰つてきたことを告げる。玄関を見ると『美柑』の靴が置いてあつた。あいつはもう帰つてきてるのか。

「おかえりー、あれ？学校もう終わつたの？……つて、またサボつたんだね」居間にいたのは従妹の美柑だつた。そつか小学校はもう終わつてるのか。美柑はムスツとした表情で見てくる。

「学校つまんないんだよ、たくリトは何が楽しくて通つてんだか」

俺はそう言い残し階段を上がつて自分の部屋へと入つた。



下から玄関のドアが開く音と共にリトの声が聞こえてきた。私服に着替えた俺はおもむろに時計を見ると立ち上がり机に置いてあつた黒色の指なしグローブを持って部屋から出ていった。

「あれ、もう帰つてたの？」

階段の前にいたリトは俺が帰つていたことに気づき声をかけてきた。

「おう、ちょっと出るわ」

俺はリトに出かけるの告げて玄関のドアを開けて彩南商店街へと向かつた。



彩南商店街の路地裏。彩南町は娯楽施設など色々な物が揃っている町であるが治安もまたよい方ではない。特にこういう路地裏の奥には不良が溜まり場として集まつていたりする。

「あん？ 誰だおまえ」

俺に気づいた不良が一人、その声がきつかけとなり奥からゾロゾロと不良たちが湧いてくる。

「ここどこかわかってる？」

「おれさー、最近金欠ぎみなんだよねー」

「けつこう可愛い顔してんじやん」

俺は右手に持つていたグローブを両手に装着し目の前の標的たちを睨む。

「全員、病院送りにしてやるよ」

俺は目の前にいたリーダー格のような不良の顔面に当てる。

「ブツウ！」

結果として十人ほどいた不良たちは一瞬にして負けてしまった。俺は倒れた不良たちから盗った財布から現金を抜いて自身の財布に入れた。

「流石、ここまで数いたらけつこうな額になるじゃねえか」

俺は膨らんだ財布をポケットに入れて路地裏から出てそのまま商店街を進んでいった。



夜、家への帰り道を通っていた時だつた。偶々目線を上へ向けたのだがなにやらリトと桃色髪の少女と共に家の屋根を走つていた。

「なにやつてんだ？ あいつ、つか誰だあいつは。彼女か？」

するとすぐに黒いスースを着た男二人が追いかけていった、いやホント何やつてんの。

「まあ、リトだしなんとかなるか」

俺はもう疲れたのでそのまま無視して家に戻つたのであつた。



翌日の朝、食卓へと向かい部屋を出ると同じタイミングでリトも部屋から出てきた。
何やらグツタリしている。

「あーー」

「……どうした、朝からグツタリして。二日酔いか?」

「違うよ、オッサンじゃないんだからさあ。……昨日色々あつたんだよ」

昨日、妙な格好をした桃髪の女と一緒に屋根を走っていた奴か、やっぱ彼女なのか?
そのままホテルに行つて色々ヤンチャしたせいでグツタリしてくるか。

「リト、大人になつたな」

「え?」

リトにそれだけ言い残し居間へと向かつたのだつた。



彩南高校にて、俺は現在担任の先生からの説教が終わり職員室を出て教室へ戻つてき
た時だつた。

「ねえさつきの見た?」

「見た見た、変な服着てたけどスッゴい美人だつたよねー」

「桃色の髪の毛とか綺麗だつたねえ、外国人かな」

桃色の髪に変な服?俺の中でそれに当てはまるのは昨日リトと走つていた奴なんだ
が。

「…………行つてみるか」

廊下を出て少し進むと人が集まりいっぱいになつていた、通れねえ。

「おい」

「なんだよ、ゲツ!?!ま、魔王!」

魔王という一言だけで周りの生徒は皆は避けて道を作り出した。

「れ、レイト!」

「誰?」

リトは頬を赤めながら俺の名前を読んだ、頬が赤いのは桃髪の女がリトの腕に抱きつ
ているからだろう。

「り、リト。…………お前魔王とどういう関係なんだよ、舍弟か?」

「は?魔王?あ、ああレイトは従兄だよ」

そんな返しに髪の逆立つた男子は驚いていたが、桃髪の女は妙な道具を片手に持つて

いた。

「あ、作動しちやつた」
ボンツ！という音と共に煙が出てきた。煙が無くなると学生服と妙な服だけが残さ
れていた。



それから数時間がたつて空は暗くなり、星がキラキラと光輝いていた。

「…………サボらずに最後まで授業受けたの何日ぶりだろうか」

そう、入学してから一ヶ月後に午後は抜け出しているという学園生活を送っていた俺
は自分で自分のことを珍しいと感じていた。

「ん？…………なんだあれ」

河川敷まで来ていた俺は遠くにリトと桃髪の女が一緒にいるところが見えた。それ
にあともう一人、知らない男もいた。

「また変な衣装を着た人が増えたな」

銀髪にマントそして鎧となんともまあ凝つてんな、と俺は思つた。

「…………！」

驚いた、コスプレのイケメンはいきなり剣を出したのだ。最初は偽者かと思ったが、違う。

「…………へえ」

俺はカバンに入れていた黒い指なしのボクシンググローブを両手に装着した。



「ララ様に見合うか否か！私が試させてもらう！」

デビルーク星王室親衛隊隊長の座につくデビルーク星No.1の戦士『ザステイン』は目の前にいるデビルーク星の姫『ララ・サタリン・デビルーク』に見合う男なのか試すために愛剣である『イマジンソード』をリトに向かつて降り下ろそうとした時だつた。

「誰だ！」

ザステインは降り下ろすはずだつた剣の軌道を横に走らせた。

「つぶな！それやっぱ本物なんだな」

そこにいたのは両手にグローブを装着したレイトだつた。

トラブル2　与えられた使命

俺は拳を前に突きだし構える。事情はよく分からねえがとりあえず従弟が危険つてことは分かる、けどそれよりも俺は。

「……貴様、己よりも強いものが現れた時に興奮する戦闘タイプだな。王とまつたく同じだ」

「オウ？ つてのは誰かは知らねえがお前は強いんだろう？ 最近つまんなくてよお。 少しだけ俺の相手になつてくれ」

後ろをチラリと見るとリトは震えている、それに対して桃髪の女は何事もないかのように自然体でいる。

「悪いが私は後ろにいる地球人がララ様に見合う男なのか確かめねばならない、そこをど、つけ！」

俺は鎧イケメンの顔面目掛けて右の拳を放つ。油断していたのか鎧イケメンは後ろに大きく下がった。

「驚いた、地球人は貧弱と聞いてたが。 いるにはいるのだな、しかしこのデビルーグ星王室親衛隊隊長の首は容易く取れん」

「どーだか、これでも伊達に魔王なんてあだ名で呼ばれてねえから、な!!」

お次は右のストレートと見せかけ顔面目掛けてハイキック、しかし相手も相当な手練れだ。簡単に避けられた。

「……チツ！当たれよ、んで死ね」

「急に口が悪いな、まあ私もデビルーク星ではN.O. 1の戦士と呼ばれていてね、そう簡単には当たられないさ」

そして俺は気づいた。俺のハイキックは避けて上の線路へと着地した鎧イケメンなのだ。

「ん? どうした地球人構えを解いて」

「あぶないよー」

ズドッ! という音を響かせ鎧イケメンは宙を舞つた。そのままコンクリの壁に激突。

「こてつっ! ?」

と、とても情けない叫び声と共に鎧イケメンはズルリと地面に倒れた。

「なんだ、やっぱギャグなのか? これは」

「うおおおおおおおおお!!!」

「おわつ! 」

急に雄叫びをあげて起き上がった、頭からは血がドバドバ出ている。錯乱したのか?

今度は剣をブンブン振り回してきた。これじゃあキチガイに刃物、めっちゃあぶねーな。

「スベツ!!」

また転んだ、今度はララと呼ばれる桃髪の女が足を引っかけて、いじめか。

「ら、ララ様?」

鎧イケメンは困惑した目でララと呼ばれる女を見る。ララは怒ったような表情で言つた。

「んもおー! デビルーク星N.O. 1の戦士つて呼ばれてるザステインに地球人が勝てるわけないじやない!」

「し、しかしララ様。これは」

なんだ、さりげなく俺は勝てない発言されたんだが。まあ、それはいいとしてリトも走つて追いかけてきたようだ。

「これはララ様に見合うかどうか確認るものにして」

「もう! 婚約、婚約つて! パパへどーせ私より後継者の方が大切なんですよ!」

「そ、そんなわけ『いい加減にしろっ!!』

その時、滅多に怒らないリトが怒鳴つた。珍しいこともあるもんだと思ひ俺は怒るリトを眺めていた。

「人のことかってに縛りやがって、普通の生活させろよ！もうこれ以上好きでもねー奴と結婚とか。……だから、もう帰つてくれ！」

俺はその時、鞄を河川敷に置いてきたことを思いだしグローブを外して静かにその場を去つた。去り際にリトの怒号が聞こえてきた。

◆
自由にさせろよ、と。

湯船に浸かり今日あつたことを思い出す、ザスティンと呼ばれる戦士に様付けされるララとかい桃女にデビルーク星と言われる星。

「宇宙人とでも言いたいのかよ」

でもだとしたらあの身のこなしはどう説明するのだろうか、電車に跳ねられても平氣でいられるほど頑丈な体。

たぶん、普通にプロボクサーの選手や空手家などが正面から電車にアタックしても軽傷じや済まないと思う。

「面白くなつてきた」

今まで抜けてた何かが埋もれたような気がした。



うわあ!! そんな声が俺の目覚まし時計となつた。その声の発信源はむかえのリトの部屋だ。

「ん、朝からうるせえ、な」

俺はリトの部屋に入り忠告しようとしたのだが、リトのベッドにはもう一人。桃色の長い髪に大きな胸、そして腰の辺りから生えている黒い尻尾。

「…………学校休むか?」

「ちがーーーう!!!」

リトの声は家中に響いた。



「ふーん、結局お前は宇宙人なのか」

俺はあるのあとリトに直接話を聞いた。ララ・サタリン・デビルーグは宇宙を支配するデビルーグ星のお姫様。んで婚約すんのがイヤで地球に避難したら偶々、リトと出会い

惚れたと。あ、ちなみに惚れたのなんだのはララから聞いた。

「なー、お前のパパってやつ。デビルーグ王は強いのか?」

「んー、強いよ!たぶんこの宇宙で一番強いと思う!」

◆
その言葉を聞いてますます面白くなってきた。宇宙最強の男、いつたいどんな奴なんだろうか。

「レイトはなんでそんなに強いのー?」

「んあ?俺か…………まあ、自然とこうなったかな。喧嘩ばっかしてたし」

◆
そんな俺の返答にララはふーんと頷く、聞いておいてその反応ですか、ともツツコミたくなつたがそれじやあもう終わりそうにないのでやめた。

昼休みが終わり午後の授業の最中、クラスの皆は全員俺を見ている。
「え、ええと。江崎くん?」

「ああ?」

俺が午後の授業にいるのがそんなに珍しいのか、担任の先生は困惑していた。
「ひや、なんでもありません」

昨日も俺は学校にはいたが、授業をサボつていない訳ではない。

「…………ん？」

外を眺めているとグラウンドでは女子が体育の授業を受けていた。だが、それよりも違和感を感じるものがあった。あれは、佐清さすがとか言つたか？なんか前見たときよりも人間味を感じない。



その日の放課後、俺はリトと共にザステインの元に来ていた。

「なんだそれ？」

ザステインが持つてるのは宙に浮く結晶。ザステインをそれについて説明し始めた。

「今日は結城リトそして江崎レイト、君たちに王直々からメッセージを持ってきた」「俺も？俺は結婚だのには関係ねーんだけど」

まあ、聞いてくれとザステインは言う。ザステインは例のデビルーグ王について話してくれた。

「ようは全宇宙を支配する凄い人なんだろう？」

「そういうことだ、では心して聴くようにな。

ブオンという起動音をたてて音がなつた。

『よお、結城リト』

威厳のある声、リトの方をチラリと見ると少しだけ震えている。緊張しているせいか。

『ザスティンから話は聞いてるぜ。てめえをララの婚約者の一人として認めてやる!』
やはりそういう話か。分かつてはいたがこういう話なら、俺は尚更いらねえのでは?
と思ってしまう。

『地球人は貧弱らしいがな、あのララが初めて好意を抱いた程の男だ。……俺はお前の
器に期待している』

話がどんどん大きくなつてくるな。リトは冷や汗ダラダラだな、だがそれがどれほど
重要なのか伝わる。

『いいか、いずれ俺が決める「婚姻の義」。それまでララを守りとおして見せろ。……
そして江崎レイトだつけか?』

ん?俺にも何かあるのか?いや、俺は無関係なんだが。
リトの方を見るがリトは横に首を振る。

『てめえにララおよび結城リトの護衛を任せる。言つとくがてめえに拒否権はねえ』

俺。

『てめえのこともザステインから聞いてる、なんでもザステインと渡り合つたそうじやねえか。その実力を見込んでのことだ。結城リトのことは既に全宇宙に伝わっている、こいつを狙う輩がやつて来ることはもう一目瞭然だ。婚姻の義まで守つて見せろ、もし他のやつにララを奪われたりしてみろ、そんときはてめえらの命とこのちっぽけな惑星ほしごとぶつ潰す。……覚えとけ』

ブツンと切れてしまつた。ザステインは結晶をしまい俺たちを見る。

「言つておくが、かつてデビルーケ王の怒りを買った輩がいたが、そやつは母星ごと消された。……すなわち、君たちが王の期待に背いた場合、地球は消滅する」

デビルーケ王、とんでもない男に目をつけられたな。俺としては面白くなつてきたので申し分ないが、リトはどうもダメみたいだな。

「ち、地球が消滅」

俺は白くなつて倒れるリトを放つて家へと帰つたのだつた。

トラブル3 宇宙からの侵略者

昨日、デビルーク王直々から使命を与えられた俺は期待とやらに背かないために登校と下校は一緒にすることにしたのはいいが。

「リト！」

「だ、抱きつくなつて！」

朝っぱらからずつとこんな感じだ、小さい頃からアイツといふがまさか全宇宙を統べる惑星の姫様に好かれるとは。

「おいリト、近所のババアどもが見てるぞ」

「お、オレじやなくてララに言つてくれ！」

そこから少し歩いて学校に着いた、校門にいたのは佐清だつた。俺はこの間のことを思い出す。

「…………

前にグラウンドで見たアイツの目、そして雰囲気。最後にデビルーク王が言つていたリトたちを狙う宇宙人。

「リト、気をつけろよ」

「え？・どういうこと？」

俺はララとじやれあうリトを置いて教室へと向かつた。

◆

俺の不安は放課後まで続いた。昼休みや授業中にサボつたりして佐清を見張つたりしていたが、特に目立つたところはないが、気になつたのはやたらと女子を見ていたことだつた。

特に西連寺とかいう女子を見てた、もしも宇宙人とかじやなく普通の人間だつたらそれはそれで危険だ。

「リト、帰るぞ」

俺は一年A組の教室へと入るがそこにリトはいなかつた。俺は偶々そこにいた男子に問いかける。

「おい」

「は、はい！」

「結城リトはどうだ」

「え、えとお」

A組の男子はビビってるせいかヘナヘナしながら中々喋らない。

「リトならさつき走つていきましたよ」

「あ?」

「あっちの方へ、なんかめっちゃ焦つてたけど」「…………!?」

まずい、呑気にしてた場合じゃなかつた。例の宇宙人がリトとララを狙いに来たんだろう。俺はリトが向かつた場所まで走つていつた。

◆
「春菜ちゃんを離せ!!」

オレはそう叫ぶ、目の前にいるギ・ブリーと名乗る宇宙人に向かつて。自分が非力なことぐらい分かつて。

喧嘩なんて小学校以来してないし、喧嘩といつても口喧嘩しかしたことないし。あ、一回だけ殴りあいの喧嘩はしたことあるな、レイトと。

オレの後ろにはララがいる、それに対しても前には真の姿を見せたギ・ブリーはめちゃくちや強そうだ。

「キヒヒヒ、さあ早くララを渡せ！さもなくばお友達の血を見ることになるぞ!!」

クソ！このままじや春菜ちゃんは。俺は今どきになつて深く後悔した。ララの親父はは期待しているとか言つてたけどオレの器なんてたかが知れてる。

「ララ俺がアイツの注意を引くからおまえはその隙に春菜ちゃ：西連寺を連れて逃げる！」

「その必要はねーぜ」

その聞きなれた声にオレは目を見開く。後ろ振り返りるとそこにいたのは汗をかいだレイトだった。

「クソ！少し遅かつたな。……やつと会えたぜ宇宙人！さあお前の本気を俺に見せろ！」

助けに来たと思つたけど強敵狙いだつたのか、いやまあ分かつてはいたけど。

「ひ、なんだお前は！」

「俺か？俺は『魔王』だ！」

というかザステインの時もそうだつたけど何気にその異名氣に入っちゃてるよな。

「お、女がどうなつてもいいのか!?」

「そ、そうだ春……じゃなくて!!!西連寺を助けてくれ！」

「知るか！」

ええええ、ヤバイよ。この人目の前の強い敵にしか興味持つてないよ。

「く、くそ！それ以上近づいたらこの女を！ホントに殺つちやうぞ！ホントだぞ！」
「知らねえよ、殺るんならとつとと殺れよメンドクセー！」

「いやそれが一番ダメだから!!」

レイトは片手に持つていた黒い指なしのグローブを両手にはめた。

「来ねえならこっちから行くぞ!!」

「ひひひい!!ごめんなさい!!」

ピタリとレイトは足を止める。今の言葉には俺もララでさえもギョツとなつた。

「は、はあ？」

「は、ち、ちがー！フン！それ以上近づけば女の体はどうなるか分かつているのかー！」
「いやそれさつき聞いた」

「な、なんだ？ギ・ブリーの奴さつきとはまつたく態度が違うぞ？これつてもしかして。
「チツ！意味わかんねえ、もつかい行くぞー！」

「ひひひい!!」

ギ・ブリーはボールに転けて頭を地面にぶつけた。その次にギ・ブリーは頭を抱えながらのたうち回っていた。

「いたい！死ぬう!!」

そういうえばザステインが言つてたな、皆が皆強いわけじゃないって。

「ツガ!!」

「とんだ見込み違ひだ」

レイトは右足をギ・ブリーの顔面めがけて蹴りあげた。

重すぎた一撃を食らつたギ・ブリーはそのまま気絶、その後ギ・ブリーは段々体が小さくなつたのだ。

「なにこれ？ 安っぽいマスコットキャラみてーな体」

「さ、さあこれが正体？」

『おや？ これは「バルケ星人」ではないですか！』

バルケ星人？ こいつのことか。俺はギ・ブリーの首を掴みまじまじと見つめる。
『優れた擬態能力を持つ代わりに肉体的にはひ弱な種族ですぞ』

「は、ハツタリかよ、なんつーか残念すぎてなにも言えない。逆にかわいそーだな。
「なあ、もしかして宇宙人ってのはデビルーカ人以外はみんなこんななのなか？」

『いえ、デビルーカ人と比べるのもどうかと思いますが、宇宙には「殺し屋」なども数多くいます。中にはデビルーカ人と同じようなステータスの高い種族も数え切れない程いますぞ』

それなら良かつた、俺はほつと安心する。せつかく面白くなつてきたのに一気に萎え

るところだった。

「さてと……後は頼むわ」

「ええ!?」

◆
誰が後片付けなんてメンドーなことするかつてんだ。俺は窓から外へ出てそのまま家へと帰った、護衛任されてるけどもう何もこないよな、たぶん。

「ただいまー」

家へと戻ってきたことを告げて俺は居間に入つた、居間にいたのは美柑だつた。

「おかげり、……ムフフ」

「な、なんだよ」

いきなり変な笑い方をした美柑に俺は戸惑つた、美柑はニヤニヤと笑つており、俺をジーッと見つめている。

「レイトもやつと学校サボらないようになつたな、つて思つてね。これもララさんが来ててくれたおかげだね」

「そんなことかよ、俺はある二人の護衛を任されてんだ、ホントはこんなことしたくねー

んだぞ。やんなきや地球諸ともおしまいだからな」

あつそー、と美柑はニヤニヤ笑いながら台所へと向かっていった。

「た、ただいまー」

「ただいま！」

どうやらリトとララが帰ってきたようだ。居間へとやつて來たりと見ると既にボロボロ。

「さ、散々な目に遭つた」

今日も不幸全快だな、と思い俺は居間を出て二階の自室へと入つたのであつた。

トラブル4 素敵なマイマザー

今朝、というより昼、起きればテーブルに置き手紙が残され家には誰もいなかつた。

「そーいや、ララ連れてどつか行くとか言つてたな」

俺は台所に置いてあつたカツップ麺にお湯を入れて三分経つまで今日何しようか考えた。

「……俺も暇だし、あっち行くか」

俺はカツップ麺の蓋を剥がして麺を啜つた。



『色北町』、彩南町から少し離れたところにある町であり規模は彩南町と比べてほんの
ちょっと小さい。

「おいそこのアンちゃん」

「んあ？」

駅を少し離れたところまで歩きコンビニへ入ろうとした時だつた、後ろを振り向けば

そこにいたのは赤、黒、白の特攻服を来た男たちだつた。

「アンちやん、見かけねーな」

「この町に何のようだ？ アアアン？」

「ここがどー言うところか知つてきてんのか？ オオウ？」

なんというか、すごく残念つていう気持ちになつた。最初に話しかけてきたリーゼン
トの赤色特攻服に右側が金色、左側が銀色の不思議な髪色の黒色特攻服、モヒカンの白
色特攻服。

「誰だおまえは」

それがこいつらに最初に言つた言葉、どうも相手は調子に乗つてゐるらしい。

「アア!? 誰だ、だと!? 俺様はこの色北町を支配する男！ テツオ様だッ！」

「パラリラパラリラ!!」

三人は決めポーズを俺に披露したあと、すんごい形相で俺を睨んできた。

「とりあえず金置いてけボギヤアツッ!!」

「退けろカス」

俺の右ストレートがテツオという男の顔面にジャストミート、テツオは空中をグルグ
ルと回転しながら吹つ飛んでいつた。

「テツオオオ!!」

「兄貴イイイイ!!」

なんなんださつきから煩いな、視線を感じコンビニの中を覗くと店員は白い目でこちらを見ていた、俺はコンビニを辞めてそのまま目的地へと向かった。



「…………」

俺は目の前の古くボロくなつたアパートを見つめる、ここは俺が生まれた場所であり母さんと二人で生きた場所だ。

「おや？・レイくんかい？」

そんな声がした、振り返るとそこにいたのは両手に食材が入つてゐるビニール袋を持つた大家のフミコさんだつた。

「フミコばあさん、……久しぶり」

「レイくん、一年ぶりだねえ、また大きくなつた？」

俺は定期的、といつても一年に一度だけここに来る、あの頃の弱い自分を忘れないためには。

「持つ？」

「いいのかい？助かるよ、最近腰が前よりも悪くなつてねえ」

俺はフミコばあさんの持つ大きいビニール袋を両手に持つた、俺はそのままフミコばあさんの部屋まで持つのを手伝つた。

「お礼に何か食べてくかい？」

「いや、いいよ、……部屋見て帰るつもりだつたし」

「……私もあの日のことは今でも忘れないよ」

あの日、母さんが目の前で死んでしまつた日、事故だ。漫画や小説、現実でもある話、母さんは俺を庇つて死んだ、当時、まだ小さかつた俺とフミコばあさんの目の前で死んだ。

「…………じやあ、鍵持つてる？」

「はいよ、103号室の鍵ね」

俺は昔、このアパートの103号室に住んでいた、母さんと二人つきりで。父親は俺が生まれた日に交通事故で死んでしまつたらしい、俺はそう聞かされた。

俺は部屋の外を出て103号室の部屋の前での頃の出来事を思い出す。

母さんが死んだあの日のことを。



あれは忘れもしない、真夏の猛暑日だった、俺は母さんと二人で買い物帰りに公園に寄っていた。

『あらん？ 江崎さん？ 買い物の帰りかしら？』

あの頃のフミコばあさんは今と大分違ひどつかの女帝のような姿をしていた、時の流れってのは残酷だな。

『フミコさん、こんにちは、お夕飯の具材を買いにレイトと二人で商店街に』

『あらそお、レイくんこんにちは』

『こんちわーす』

あの時の俺はシャイというか母さん以外に女人ととはあまり話したことがないの
で苦手だった。

『ほおら！ 挨拶はちゃんとしなさい！』

『……こんにちは』

『良くできました！ 挨拶はちゃんとしないと素敵な男にはなれないぞ！』

母さんはしゃがんで俺の目線に合わせてニッコリと笑つて見せた。

『さて、そろそろ帰ろつか！ お片付けしておいで』

『うん』

俺は母さんの言う通りに砂場へ戻り使っていた道具を袋の中に入れ始める。

『父親、やっぱりいないと疲れるわよねえ。私もそだつたわあ』

『大丈夫です！将来は素敵な男に成長したレイトに養つてもらいますから！』

その言葉に俺は首を縦に振った、あの頃の俺は成長して大人になつたら母さんを養う、そんなことばかり思つていた。

『いい子よねえレイくん』

『あの人似ですね』

母さんは少し寂しそうな顔をする片付けを終えた俺は母さんの元へ行き母さんの手を握つた。

俺と母さん、そしてフミコばあさんはアパートへの帰路を歩いていた。

『お夕飯はなんとカレーです！』

『…………』

俺はその言葉を聞いて嬉しくなつた、俺の好物は今はもう味わえない母さんのカレーとおでんだ。

『私も手伝うわよお』

『え、でも悪いですよ』

『いいのよお、あ・ま・え・て・もつ！』

母さんはあの時、どう思つていたのだろうか。確かあの時既にフミコばあさんは息子がいたはずだ。

『で、ではお言葉に甘えて』

信号の緑色の光が点滅し赤へとかわった、俺たちは横断歩道の前で緑色にかわるまでまつた。

母さんとフミコばあさんが談笑している、そのなかで俺は、俺だけが気づいたのだ、ヨロヨロと不安定に走るトラック、そして目を閉じながら運転する運転手が。

『アブねーぞ!』

そんな誰のかもわからない声に気づいた母さんは俺を抱き締めて、轡かれた。

俺は幸い擦りむける程度の軽傷で済んだ、対して母さんは重症、今でも覚えている俺の体にベツトリとついた赤い血が。

呆然とその光景を見ていた俺に母さんは耳元で何かを囁いた。

やさしく、素敵な人に

それを最後に母さんは動かなくなつた。

トラブル5 鉄の心

「げひやひや、ここがターゲットのいる地球、空気がウメエじよねえか。 ターゲットを殺す前に腹ごしらえでもするか」

暗い路地裏で異形の存在はひとりでに咳く、両手に持つ光線銃をもつて、異形の存在が見つめる場所は目的のターゲットがいる彩南町ではなく離れたところにある色北町であつた。



「懐かしい、におい」

俺は四畳半の部屋で寝そべりくつろいでいた。畳や壁、昔暮らした場所のにおいが今もする。

「……」

俺は天井を見つめながらボウとする、今の時間帯は母さんが夕飯を作ってくれる頃だ。

そんな思いに耽つているとドタドタと聞こえてくる、音の大きさ的に隣の部屋じやない。

『ツセエ!! クソババア!!』

そんな暴言が聞こえた、この声、どつかで聞いたような気がする、俺は気になりドアを開けて外を確かめるとフミコばあさん部屋のドアが勢いよく開いた。

「くそ！ なめやがつて」

出てきたのは昼間の不良、テツオだった、たしかそんな名前だったような。

「あ？ てめえは!?」

「色北町の支配者（笑）」

「てんめえー!? 表でろやあ！」

「もう出てるよ」

俺に気づいたテツオは俺の胸ぐらを掴んだ、それからすぐにフミコばあさんが部屋の奥からやって來た。

「テツオ！ 何やつてるんだい！」

「げ、ババア、ちくしょ！」

テツオは手を離し急いで遠くへ走つていった、フミコばあさんは止めようとしたが真っ直ぐに俺を見つめた。

「ごめんなさいねえレイくん」

「あいつ、テツオつったか？」

「知ってるのかい？」

「ここに来る途中絡まれた」

「……あの子はほんとに」

フミコばあさんは頭を抱えて呻く、俺はテツオが走つていった先を見つめる。

「あの子は私の孫でね、今年私のところへ越してきたのよ」

「今年やつてきてもはや支配者を名乗つていたのか、あいつは」

まあ、確かに舍弟らしき者を一人連れていた、腕っぷしには自信があるのだろう。

「俺ももうそろそろ帰るつもりだつたし、ついでに探しとくよ」

「本当かい？ ありがとうねえ」

俺はテツオが走つていった先を進んで暗闇に消えていった。



◆
「チツ！ うざつたらしいババアだぜ、……んあ？」

偶々目に入つた路地裏、奥はチラチラと光つている、テツオはそんな怪しく光る何か

に魅せられ路地裏の奥へと入つていった。

ところを俺は遠くから見ていた、なにやつてんだアイツは、どうみても怪しい、宇宙人か？いや、でもここは彩南町から少し離れている色北町だ、いくらなんでも考えすぎか。

「たく、もうすっかり夜じやねえか、リトと美柑、あとララ、大丈夫か？」

俺はそんなことを考えながら路地裏へ入つた、見たところ彩南町とほぼ変わらない汚さだつた。

「グアアアア！！」

奥から聞こえたテツオの悲鳴、それを聞いた瞬間、俺は足を早めた。

「げひやひや、うまそーな地球人だぜ」

きんもちわる！顔が触手でできてる、エロゲーでもエロ漫画でもないんだぞ、ここは。

「おいこら、キモ星人

「だあれがキモ星人だ！」

「ウワオ！！」

顔から伸びた触手が壁を貫く、避けるのに精一杯だった、奴の触手、鞭のようにしなやかで槍のように鋭い、厄介だな。

「げひやひや、今日はついてるぜ、獲物が二体も手にはいるなんてよお」

「ぶぶぶ」

「テツオのやつショックのあまりに泡吹いてのびてやがる、この町の支配者とか言つておいてその様かよ。」

「ワリイけど、テメエの持つてるその木偶の坊を俺によこせ、無理なら頭消し飛ばして奪う」

「げひやひや、このニヨロル様を殺すと? 寝言は寝てイエ!」

「そうか、俺はそう言い残して地面に転がっている壁の破片を取つた、そして、その破片をフルスティングで。」

「イギヤアアア!!」

触手まみれの顔面にクリティカルヒット、テツオは離されバタリと地面に倒れた。

「隙あり! つな!?」

俺は突きだした右手を触手に捕まれた、しまつた! いつものグローブ忘れてきた!

「よくも、やつてくれたなあ! 下等生物!!」

「アガツハ!!」

俺は壁から地面へと叩きつけられた、俺は口から血を流して倒れこむ。

「クソ! 見誤ったか!」

触手の宇宙人はズカズカと俺に近づいてきた、先程まで青かった触手は赤へと変色し

ていた。

「もう怒った！ ゆ」

「る」

「さ」

「ジユバツ！ そんな音が鳴り響いた、音と同時に触手の宇宙人はきれいに三等分にされていた。

「な、なんだ？」

「俺は呆けることしかできなかつた、やがて時間が少したつて辺りを見渡す、テツオは氣絶から覚めた。

「あ!!あの触手は!!」

テツオはチラチラと視線を動かし俺に気づく、そのまま下へ視線を落とした。

「あ、あんたがやつたのか？ あのバケモン」

「い、いや俺がとどめ指した訛じやねえが、お前危なかつたぞ、あと少し助けるのが遅かつたらそのまま死ぬところだつた」

俺の言葉にテツオは何か気づき、バツと立ち上がつた、テツオは俺を睨む。

「すんませんした!!」

は？ いきなりのことでのがなんだかわからないが、テツオは立ち上がつたと思つたら

急に土下座。

「な、なにしてん」

「俺を！ 舎弟にしてください！ 兄貴！！」

「は？ は？ は？ いやいやなんでそなうなる、テツオは額を地面に擦り付けてそなういつづける。」

「頼みます！ なんでもしますから!! 舎弟にしてください！」

本当に、なんというか、少し古いというか。俺が今まで見てきた不良を見てもこんな奴はいなかつた。

「ええ、まあ、なんでもするなら」

俺に舎弟ができた。